

学童期の子どもに対する入院時プレパレーション
ーツールとしての「エプロンシアター」作成の試みー

Preparation performed at the time of the hospitalization to the child of later
childhood ーThe trial of creation of the apron theater as a toolー

東4階：○ 篠原 千寿 池原 千賀 大曾 契子

医学部保健学科：鈴木 泰子 阪口 しげ子

《要旨》

子どもは入院することによって、家族や友人との別離、病気や治療・検査・処置に伴う身体的苦痛、入院や治療による制限、見慣れない環境などのストレスに曝されるといわれている。こうしたストレス状況は就学後の子どもであっても、家族が付き添うことなく、子ども自身で入院治療生活をおくっている場合には大きく存在している。さらに、入院時のオリエンテーションは保護者主体であって子どもを対象として発達に応じた説明がされていない現状もある。そこで、今回子ども自身が入院生活を受容し易くなるように、入院オリエンテーションをエプロンシアターを用いて行うことを計画し、実際に学童期前期の健康児を対象に実演した結果、子どもたちの反応からこの方法が入院時のプレパレーションとして有効であることが示唆された。

《キーワード》

入院オリエンテーション プレパレーション エプロンシアター

I. 緒言

A病棟では、就学後の子どもに対しては家族が付き添うことなく、子ども自身で入院治療生活をおくることができるように、看護を展開している。初めて入院を経験する子どもたちにとっては、治療・処置・検査に伴う身体的苦痛に加えて、家族・友達等大切な人との別離、見慣れない環境や人は大きなストレスになるとみなされている。したがって、入院時に子どもが未知の入院生活に適応できるように援助をすることが重要となるが、現在の入院時オリエンテーションは、保護者主体であって個々の子どもに応じた説明がされていない状況にある。また、家族が付き添うことなく、子ども自身で入院治療生活を送ることを余儀なくされる子どもでは、家族と離れて集団で生活をした経験が少ないと考えられるため、特に援助が必要になると考えられる。そこで、学童期前期の子どもを対象として、子どもたちが注目し理解しやすいオリエンテーションを実施して、未知の入院

生活に対して恐怖感や心理的ストレスを軽減し、子どもが主体的に医療処置に参加できるように心理的な準備（プレパレーション）ができるようにしたいと考え、立体的かつ動的に入院の説明ができるツールとして、「エプロンシアター」を用いることを検討した。エプロンシアターとは胸当て式のエプロンを舞台として、ポケットから人形やいろいろな材料を取りだし、お話をする方法である。この方法の特徴としては、演者の演技を見ることで、観ている側が安心感を得て物語に集中し易いこと、さらにエプロンのポケットから人形が出入りすることで、子どもは高揚感を得、楽しむことができるなどがあげられる。エプロンシアターは繰り返し同じ内容の演技を行うことができるものであり、オリエンテーションに用いるツールとしても適するものであると考えられたため、今回これを用いて入院時のプレパレーション用ツールを作成することを試みた。

<用語の定義>

プレパレーション：、医療処置を受ける子どもの恐怖感や心理的ストレスを軽減し、子どもが主体的に医療処置に参加できるようにする心的準備

Ⅱ. 方法

1. 期間：H18年6月～12月

2. プレパレーションツール「エプロンシアター」の作成：

「〇〇ちゃん（君）の病院での生活」というテーマでシナリオと生活場面に応じた登場人物・物品を作成。内容はどの疾患にも使えるもので、なぜ入院が必要となったか、医師・看護師は何をする人か、療養生活の1日の流れはどうなっているか、家族との関係や学校生活の変化を説明し、子ども自身がどのように対応しているかを分りやすく作成した。素材はフェルト地とし、子どもが安心して、親しみを持ってみられるように工夫した。病気の状態と意識の集中度を考え15分間で演じられるものとした。

3. 「エプロンシアター」の妥当性の検討：

初回入院の子どもを対象とするためと適応年齢を考え、健康児7名（小学4年生1名、3年生2名、2年生2名、保育園年長1名、年少1名）を対象に、集団で実演して、実演中・実演後の子どもの行動、反応、言葉を調査者間で分析した。

4. 倫理的配慮：

信州大学医学部附属病院看護研究倫理委員会の承認を得た。対象となる学童期前期の子ども保護者に対し、研究の目的とエプロンシアターについて説明。鑑賞は自由参加であり、実演途中で拒否・退席できることを伝えた。

Ⅲ. 結果

実演中は年長児1名（男）を除いて全員に、最後まで目をそらさずに鑑賞する姿がみられた。言動からは「看護師さんかわいいね」とエプロンから飛び出した医師の人形や院内学級の先生の人形などを見て笑い出すなど、フェルトで作成した人形のキャラクターにも興味が持てたようであった。内容についても「ご飯の前にうがいだね」というように生活の中で自然と行われている行動については自ら語ってくれる場面もあった。演技終了後、登場した人形や物品に手を触れてもらったところ、子どもたちはそれらに積極的に触りながら、シナリオの内容に沿った「ごっこ遊び」を行っていた。その遊びを続けさせながら、「〇〇ちゃんはご飯を食べる前に何をしていたの？」等の質問を行うと、子どもたちは正確に答えられていた。しかし、むずかしかった内容について問うと、お母さんはどこへ行ったの？」という質問があり、家族・友達との別離が伝わりにくい印象を受けた。この点に関しては実際入院している子どもたちに行うオリエンテーションでは、実際の病棟の中でいつどのように家族と面会できるか、友達に会いたくなったらどうすればいいのかなど、具体的な説明に時間をかける必要があることが示唆された。

全体として、エプロンシアター作成で意図した、なぜ入院が必要となったか、医師・看護師は何をする人か、療養生活の1日の流れはどうなっているか、家族との関係や学校生活の変化について、個々の子どもなりに理解できる内容であることが確認できた。

Ⅳ. まとめ、

エプロンシアターを用いた入院時オリエンテーションの方法は、学童期前期の子どもにとって理解しやすく、演技後に子ども自ら物品や登場人物に触れながらオリエンテーションの内容を再現し理解を深め、分からないことを明確化することも可能となる有効なツールであると考えられた。

さらにフェルトのような温かみや安心感につながる登場人物や物品を用いてのオリエンテーションは子ども達の入院生活に対する不安の軽減や今後の生活に前向きなイメージを持つことにもつながり、プレパレーションツールとしても有効なものであるとおもわれた。

尚、実際の子どもの入院時オリエンテーションは個別に行われるものであるので、医療スタッフ、注射器などの模型に触れて、再現ができるものであり、入院生活を親しみやすく、前向きなイメージで受け止めてもらうために有効な手段であると考えられた。

また、実際の入院時は個別に実施するため、より対象の子どもの反応に寄り添いながら演技や対応を行うことが可能になると考えられる。今後は分かりにくいとの意見が寄せられた家族・友達との別離野場面を中心にシナリオの演じ方さらに検討を加えながら、実際にエプロンシアターを入院

時オリエンテーションのツールとして用いて子どもたちの入院時のストレス軽減を図り、入院生活への適応が進むように活用していく予定である。

IV. 参考文献

1. 二見大介他：小児期の異なる対象分野における栄養教育教材「エプロンシアター」の有効性に関する研究, Shidax Research, Vol.3, p22~30 2003.
2. 蛭名美知子他：子どもと親へのプレパレーション実践普及—医療行為を行なう際の子どもへの関わりについて— 平成14・15年度厚生労働省科学研究 2004. 3月
3. 中谷真弓：ピカピカのエプロンシアター 小学館 2001. 5月.

図 1



図2



图3

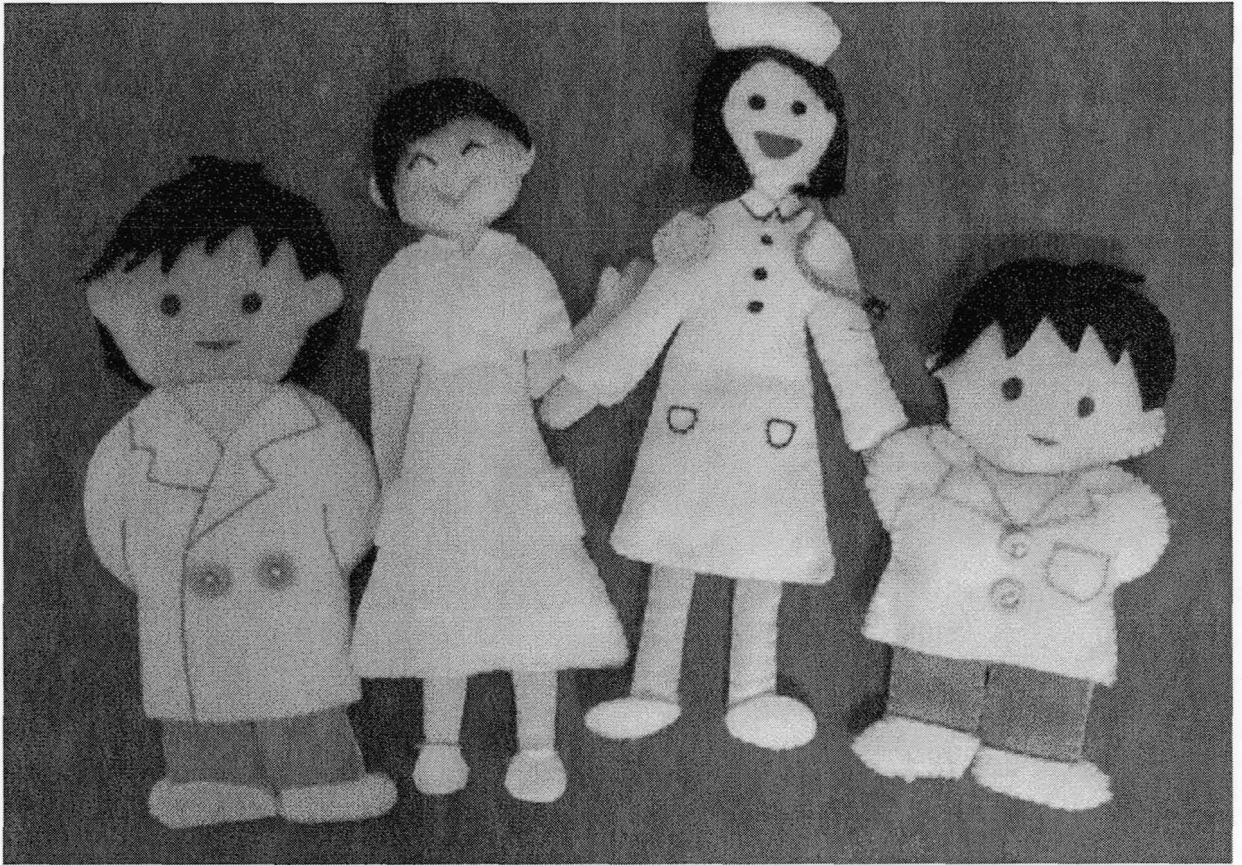


图 4

